

第 18 回辰野千尋教育賞 講評

令和 7 年度の本賞選考委員会は、21 本の応募論文の中から、優秀賞 1 編、奨励賞 1 編を選出しました。いずれの実践研究も日ごろの実践に根差した取り組みを中心としながら、その継続性や発展性を十分に期待させるものであり、実践の結果についても単なる印象にとどまらない実証性を含むものでした。それぞれ、受賞者の所属は高等学校、中等教育学校と異なりますが、以下にお一人ずつ講評を記したいと思います。

★優秀賞は山本靖氏が受賞されました。応募論文のテーマは、「地理情報科学の Well-being への貢献—生徒エージェンシーの涵養をもとに—」です。氏は、高等学校の地理授業において、地理に関わる情報科学、地理空間データサイエンスを実践してこられましたが、そうした中で、紙地図を用いた授業への限界から、GIS や多変量解析を援用したデータ処理に基づき、地域の課題を可視化するという取り組みを行っています。特に、GIS による空間的推論はより高度な推論へとつながる可能性があります、Well-being の実現には、地域の何が課題であるのかを把握することが、その第一歩となります。

そうした観点に基づき、これまでそのテーマに関連する「土地利用と農業」「フードデザート問題」などを皮切りに、「空間的な相互依存作用」「避難所の配置」など、防災・減災教育へつなげるダイナミックな授業展開を山本氏は構築されました。研究という観点から見ると、授業を素材にした息の長い接続とその分析が中心となっており、選考委員の一部からは、そのような取り組みが高く評価され、優秀賞に相応しいとされたところです。

しかし、その一方で、本実践を受講した「学習者の顔」が見えないという指摘を行う選考委員もありました。山本氏の実践に幅の広がりとおもしろさを持たせるためには、学習者側から見た授業の評価とその成果という観点が盛り込まれれば、さらに高いレベルにつながるものと思われます。

★奨励賞は窪田悠氏が受賞されました。応募論文のテーマは、「探求的な学びを促す理科の単元展開～カリキュラムマネジメントと国際バカロレアの視点から～」です。氏の問題意識は、探求的な学びを促すためには、本来、それなりの仕掛けと時間が必要になるが、それを実践しようとすればするほど時数の不足は必然化するというところにあります。確かに、そうしたジレンマは授業にはつきもので、では、一体限られた時数の中で探求的な学びを達成するためにはどうしたらよいのだろうかという疑問は、現場に立つ多くの先生方が感じられるものでもありましょう。

氏の実践の特徴は、授業を「点」として捉えるのではなく「線」として捉え、カリキュラムマネジメントと国際バカロレア機構の教育的視点をそこに取り入れたところにあります。評価のための課題「正体が不明な物質を特定する調査」は、学習者のグループがグループ内

で仮説を立て、考案した計画に基づいた実験を行い、最終的に総合考察を行うという手順で進められます。その上で、学習者には課題の目的、課題について生徒が担うべき役割、そのための状況設定、課題の成果物、評価などの観点を与え、授業で学習することについても意味を持たせました。

最終的には、授業後に活動を振り返るためのシートを開発され、その記入内容と総括的な評価や定期テストのレベルには相関があることも見出されています。ただ、本実践は大学の附属機関である中等教育学校という場でなされたものであるがゆえの結果に関わる汎用性という問題を抱えられるという指摘も委員からはありました。こうした点も踏まえた、今後の継続的な実践と研究が望まれるところです。

★以上、受賞者の応募論文内容の概略を紹介申し上げました。山本靖氏はどちらかと言えば学究的なスタンスから息の長い研究の一端をお示しいただきましたし、窪田悠氏は6年一貫という特殊な環境を活かしたユニークな実践研究を披露してくださいました。それぞれ、年齢もご所属も異なるお二人ですが、辰野千尋教育賞の受賞を機会に、ぜひ、実践に磨きをかけられ、奥行きのある研究へと発展されますことを祈念しております。また、一方で、現場に立つ実践者の一人として、教育の現場をリードされますことをお祈り申し上げ、辰野千尋教育賞の講評とさせていただきます。

辰野千尋教育賞選考会議議長